

# 問題核家族の拡大家族関係

本 村 汎

## Extended Family Relations of Problem Nuclear Family

HIROSHI MOTOMURA

### 研究の目的

個人の精神衛生が、全体としての家族の構造あるいはプロセスと関連があることは、すでに多くの研究者が認める事実であるが<sup>1)</sup>、最近では、すでに確立された診断論的枠組の発展や、集団としての家族あるいは家族成員としての個人に対する治療的接近が構築されんとしている<sup>2)</sup>。

しかし、これらの診断や治療のための枠組は、欧米においてはともかくとして、拡大家族関係<sup>3)</sup>を依然として生活の一手段とする日本社会においてすらも、核家族の枠の範囲内にとどまる傾向が強い。このことは、日本および欧米の如何を問わず、家族精神医学者（family psychiatrist）と呼称できる研究者達の家族の把握の仕方からも分ることである。彼等は、家族をひとつの社会文化的な文脈のなかに存在する、自己自制的な不変の単位として考えている<sup>4)</sup>。したがって、彼等にとっては、クライアントの祖父母や親の親族体系内における活動が、ときによっては、そのクライアントやその家族成員の病理に役かっているという見解をもつことが困難である。結局、彼等の理論的枠組は核家族の両親と彼等の志向家族の相互依存性、あるいは核家族と親族集団の相互影響力をより体系的に理解していこうとする考慮が欠けていると云っても差つかえないであろう<sup>5)</sup>。しかし、現実には、核家族は、拡大家族体系や親族体系のなかにあってその生命を維持しているものであり、臨床の場といえども、この生活関係領域を無視することは出来ないだろう。すなわち、問題核家族の拡大家族関係を理論や臨床の場において第二次的にとり扱うことは妥当でないということである。

この論文の目的は、上述の様な論考にもとづいて、問題核家族が参与しているいろいろの社会的参与網（participate networks）のなかから、特に拡大家族関係を折出し、それを理念型的に特徴づけることにある。したが

って、この小論文は、ある仮説の実証的論文というよりも、むしろ仮説発見のためのパイロット的研究（pilot study）であることは云うまでもない。

### 方 法

1. 標本作製の方法 分析の対象となった標本は、パースンズ（T. Parsons）のAGILの準拠枠<sup>6)</sup>と、ガイスマー（L. L. Geismar）の「機能水準」<sup>7)</sup>の概念に立脚して、その家族の総合的機能程度を、1～7点の7段階評価基準にしたがって評価した時に3.5点以下の機能得点しか得られなかった機能程度のひくい核家族である。しかし、分析の焦点は、全体としての家族そのものにあるよりも、家族の外的側面、すなわち、AGILの枠組におけるA次元とG次元である。この様な基準によって選ばれた標本10ケースの臨床的面接および家族訪問による観察期間は、毎週一回の割合で短いもので3ヶ月、もっとも長いもので14ヶ月間である。なおこの標本は、報告者が、大阪市立大学家族学部児童相談室と尼崎市生活相談室で昭和39年4月から昭和41年12月迄の間に担当したケースのなかから抽出されたものである。

2. 標 本（次頁の第1表を参照）

### 3. 面接による治療的介入の方法

第2表 役割相互作用的アプローチ

治 療 場 面	治療者—夫—妻（ときには娘、実家の親が参加）
第一次的变化目標	夫婦関係
第二次的变化目標	子供および夫婦のパーソナリティの変化
介 入 の 焦 点	夫婦間の役割相互作用
介 入 の 水 準	夫婦の役割期待と役割行動
技 術	夫婦の役割相互作用における相互報酬量の不一致の「明確化」

第 1 表 : インテーク時におけるAGIL理論に準拠する機能得点3.5以下の解体家族の標本

施設 ケース 名称	属性	主 訴	I Q	心理学的要因	社 会 学 的 要 因				
				心理機制* (母親)	世帯主 の職業	世帯主 の学歴	家族形態	権力構造	社会階層**
児童 相談 ケ ー ス	A	分離不安, 母親が離れると泣いてついてくる	テスト 不 能	<u>Repression- Projection</u>	会 社 員 (30才)	高 校 卒	核 家 族	夫 = 妻	中
	B	注意散漫, 絵が分裂している (6.5 才)	110	<u>Repression- Projection</u>	自 営 業 (41才)	大 学 卒	"	夫 > 妻	上
	C	極度に引込み思案, 極度の tension (6.9 才)	107	<u>Repression- Projection</u>	貸倉庫業 (38才)	高等小卒	"	夫 > 妻	中
	D	集団生活ができない, 独占欲が強い, 勝気 (5.8 才)	137	<u>Repression- Projection</u>	会 社 員 (27才)	高 校 卒	"	夫 > 妻	中
	E	不安, 恐怖の度合が強い, 偏食, 指なめ, おもらし (5.1 才)	82	<u>Repression- Projection</u>	技 術 職 (34才)	高等小卒	"	夫 > 妻	中
生活 相談 ケ ー ス	G <sub>1</sub>	夫婦間の役割葛藤(妻) (46才)		<u>Repression- Projection</u>	会 社 員	商船大学卒	"	夫 = 妻	中
	H	離婚したい (妻29才)		<u>Repression- Projection</u>	職 人	中 学 卒	"	夫 = 妻	下
	M	嫁, 姑問題 (姑69才)		<u>Repression- Projection</u>	無 し	高等 女学校卒	"	独居老人	中
	S	現在の家から解放されたい, 結婚に対する不安 (24才) 独身		<u>Repression- Projection</u>	事 務 員	高 校 卒	"	父 > 母	下
	T	夫婦間の役割葛藤 (28才)		<u>Repression- Projection</u>	会 社 員	大学中退	"	夫 > 妻	中

\* 心理機制の項で示されたアンダーラインは, より支配的であることを示す

\*\* 社会階層はクライアント自身が評価したものである。

## 結 果

前頁の様な介入方法によって得られた資料の分析の結果, ベルの発見した4つの知見<sup>9)</sup> (findings) のうち3つと類似した知見をえた。その知見は次の通りである。

### 1. 葛藤強化手段としての拡大家族関係

この家族は核家族の構成形態をとりながらも, 核家族としての「集団同一性」<sup>9)</sup> (group identity) は認められず, 父方および母方の志向家族からの影響をうけて, 夫婦が絶えず緊張して, それが離婚の原因にならんとする家族のことである。すなわち, この家族は, 夫婦の志向家族との 価値的あるいは役割期待の 関係側面において, 主体的な境界維持<sup>10)</sup> が出来ないものである。

「29才の二人の子供をもつ女性のクライアントは6年間も現在の夫と一緒に生活してきたがいまだに夫が理解出来ない」と訴えてきた。話によると夫婦喧嘩がおこったのは, 夫の2, 3日の出張中に妻が, 書き置き何ひとつせず実家に帰り夫が出張から帰る迄に家に戻っていなかったことである。つまり夫は, 妻の両親が彼等の結婚に反対していたこともあって結婚後も仲がわるかった。結婚当初は夫に経済力がないことも手伝って妻の両親と同居していたが, 生れてくる子供の籍の件で妻の両親と喧嘩をし, この夫婦は妻の両親と別居するようになった。その時, 妻は別居生活に強く反対し離婚の話までもちあがった。しかし現実には夫の意見

がとおり離婚せずに親子4人でアパート暮らしをしていたわけである。」

「このような生活経験をさせていただきに、夫は、妻が実家に行くことをいやがっていた。このような状況の下で、夫の出張中の事件がおこったために、夫は腹をたてたわけである。夫は治療者に対して「夫である私に忠実でありたいという気持ちよりも実家の両親に忠実であり度いと思っているんだから……」と述べている。

なお、夫が離婚しようと決意したのは家庭内で問題がおこる時、彼と相談して解決しようとせず、実家の両親と相談して勝手に解決してきたことである。たとえば彼の話によると結婚式のもち方、客の接待の方法、親せきづきあいなどすべて彼と相談せずに、実家の両親と相談して生活してきた。事実、彼女は最初に生れた子供の籍をどうするかという件でも主人とは何ひとつ相談せず自分の両親と話をしていた。特に、子供の籍をどうするかという問題が彼等の生活のなかで大きくとりあげられたのは、妻である彼女が独り子であるという事実からきていた。彼女の両親が云うには、彼女に男の子が生れた時は夫を養子としてむかえられなかった代りに生れた男の子を彼等の籍に入れたかったとのことである。しかしこの様な彼女の両親の意見に対しては、彼女の夫は強力に反対したわけである。彼女と彼女の母親は共に「夫と相談するとどうせ反対されるにきまっているものを、別に相談する必要はないでしょう……」と述べていた。

この様に、彼女と彼女の両親（特に母親）との関係は、核家族内の生活行動という点において境界線が確立されておらず、彼女の志向家族境界の拡大化現象をおこしている。しかも興味あることは、彼女が彼女の志向家族の境界を拡大化すればする程、夫婦間の役割葛藤が悪化し、また逆に、夫婦間の役割葛藤が悪化すれば悪化する程、志向家族との結合が強化され、その境界の拡大化を、あらゆる手段を利用してはかっていこうとするところにある。たとえば、

「クライアントは、直接的な方法を利用することによって、彼女の夫を彼女の志向家族の境界範囲内に抱き込むことが出来ないために、主人の兄弟姉妹の力を借りて、その目的を達成しようとしていた。

すなわち彼女は主人である彼の兄弟姉妹に対して、彼女の気持ちを彼がもっと理解してくれる様に説得してくれる様依頼していた。この様な彼女の態度は彼が彼

のつとめている会社で同じく働いている24才の女性を愛する様になり離婚したい気持ちを言語化し、そして態度の上でそれを積極的にあらわす様になってから、強くなっていた。そのことは、彼女が彼の兄弟姉妹の家を訪問する回数にあらわれていた。その結果姉夫婦は彼女の度重なる訪問と情熱に動かされて彼を説得するにいたった。しかし、彼はその様な姉夫婦に対して彼の気持ちと彼がおかれている立場を理解してくれないと怒り、これまで姉に依頼していた洗濯ものを依頼しなくなり、姉夫婦とのこれまでの様な交際を断ってしまった。」

かくして、彼女は彼女の志向家族の境界をいまひとつ拡大化することに成功するが、それによって、彼女の主人と彼の姉夫婦との関係を崩壊させるにいたっている。したがって、彼女の志向家族境界の拡大化は、彼女の主人と彼の姉夫婦との関係の犠牲の上に成立したものであると考えることができる。おそらく、この志向家族境界の拡大化の機制は、ヴィン<sup>11)</sup> (Lyman C. Wynne) の云う「ゴムの様な防壁」(rubber fence) に相当するものであろう。しかし、この志向家族境界の拡大化の傾向は、クライアントの夫においても見られ、そしてその傾向は、夫と彼の姉夫婦との親族関係の崩壊を契機にして著しくなっている。

「クライアントの夫は、夫婦関係がわるくなって以来、洗濯や料理を妻にしてもらうことを嫌い、結婚した実姉のところに持って行って貰っていた。夕食はこれまでほとんど姉のところである様になっていた。しかし姉夫婦との交際を断って以来親のところにひんぱんに行く様になった。彼は両親に彼の夫婦関係のすべてを話し、特に彼女(妻)といかにうまくいっていないかを話し離婚したい旨を伝えた。すると夫の母親は「そんなにお前が苦しいなら離婚しなさい。人生は一度しかないんだから……、私もお前の父親とはずっと以前から離婚したいと思っていたが昔は離婚がむづかしこの年(56才)になるまで、離婚出来ず苦しんできた。私は私と同じ様な苦しみをお前にまでさせたくない。ほんとうにうまくいかなければ、思い切って離婚してもう一度やりなおしてごらんさない。私に出来ることがあれば何でも力になってあげるから……」と云って夫の気持ちを支持した。それ以来夫の彼女に対する態度はヨリ一層攻撃的になり、時には足で彼女をケルという様に暴力的な行動さえとる様に



なり、また無断で外泊したり、無断で、旅行する様になっていった。彼女は夫のその様な行動に対して夫の留守中に、夫の洋服のポケットやカバンをいろいろ調べる様になり、その点検する行動が夫にわかって夫婦関係のズレは一層わるくなっていった。」

この様に、彼女と同様に、夫も彼の志向家族の境界を拡大化してくる様になり、夫婦間の役割期待の葛藤は一層激しくなり、彼等自身の能力だけではどうすることも出来ない程に悪化してしまっただけである。

してみれば、何故にこの様な病理現象が生起してきたのだろうか。それにはいろいろの原因があるであろうが、問題核家族がその境界を主体的に、かつ構造的に維持出来なかったことも、ひとつの大きな原因として考えられる。しかし、問題は、その様な核家族の主体的な境界維持不能の機制である。すなわち、どの様な、社会的あるいは心理的機制の下に、核家族がその境界を主体的に維持出来ないかということである。理論的には、問題核家族の両親の志向家族段階の役割固着が考えられるが、現実の具体的な資料としてあらわれてきたものは、志向家族の経済力による機制だった。

「現在、Tは32才で先妻と離婚して、32才の後妻と、先妻との間にできた5才の子供の3人暮らしであるが、今から3ヶ月前までは彼等は彼の実母と同居していた。再婚後の別居の理由は先妻の場合と同様に、嫁姑関係がうまくいかなかったことにある。」

(以下は先妻の事例)

「離婚させられたTの先妻は、彼女の子供の教育方針嫁としての姑に対する態度、妻としての夫に対する態度などで姑との間に意見の一致をみることが出来ず、それが夫婦関係にまで波及して精神的に苦しんでいた。たとえば彼女は夫との関係では夫に対して「馬鹿」という言葉をつかうとか、夫を先にお風呂に入れさせないとか、夫が休んでいる時に、夫の足を平気でまたぐとか、あるいは夫の好みを無視して食事をつくるなどと姑から口ぐせの様に注意されていた。なお、子供との関係では彼女は子供が乱暴でお茶わんを割ったり、雑誌をやぶったり、おねしょしたりするのは嫁のしつけが悪いからだだと非難されていた。

この様な姑の嫁に対する態度に対して、夫婦は「僕達夫婦のこととか子供の教育などは僕達夫婦にまかせておけばよいのに」と面接場面で述べていた。しかしこの様な夫婦の態度に対して姑は「あなた達が居なく

ても、私は独りで生活していけるんだから、さっさとこの家から出ていきなさい……」という状態だった。しかし、夫にしてみれば母親と喧嘩までして別居する勇気はなく、またアパート生活するだけの経済力がなかった。(それには夫が中学卒で給料がすくないということも関係がある)」

とうとう夫は先妻に対して「いましばらくの間、母のことについては我慢してくれないか……」と頼み込むようになってしまった。しかし、やがて先妻は、夜はねられず、食欲はなくなり、猜疑心は強くなり怒りっぽくなって、通常の家庭生活が出来なくなり入院する様になった。それから3ヶ月後に先妻は離婚させられてしまった。

この症例からも理解できる様に、核家族の境界を主体的に維持していこうとする夫婦の努力は、志向家族の経済的統制によって失敗に終わっている。結局、この症例における夫は内面化された志向家族の価値と生殖家族の価値との間に心理的両価性を体験し、ひいては、その解決様式として、志向家族の価値に立脚する志向家族の境界拡大化を採用するにいたったわけである。

この様に、核家族の夫婦の役割葛藤の強化は、核家族の境界維持不能と密接な関係を持っているが、その境界維持不能のメカニズムは、分析的には、夫婦が各々の志向家族の両親に積極的に同一化して役割固着現象をおこすときと、志向家族の両親が逆に、その子供の核家族、あるいは生殖家族の境界を阻害して、価値的に拡大していくときとがある。

## 2. 葛藤投射チャンネルとしての拡大家族関係

問題核家族の拡大家族関係のすべてが、前述の様に核家族の夫婦間の対立葛藤を強化する様なかたちで働くものではない。むしろ、拡大家族関係は、核家族のメンバーが、核家族内に生じた緊張や未解決の感情を投射するためのチャンネル(channel)として利用されることがある。その極端な例は「良」、「悪」という二分法的な価値観が発生し、生活の広範囲にわたる感情的拒絶反応が、夫もしくは妻の志向家族との関連において、合理化されることである<sup>12)</sup>。

「B婦人は29才で、5才になる長女が保育所で適応出来ないということで相談室にやって来た。4回目の治療面接の時、彼女は彼女の夫が彼女よりも学歴が低いことをあきらかにし、若干の欲求不満を示した。そし

て子供が保育所で何ひとつ言葉を云わないことや、保育所の先生が出席をとっても返事が出来ないのは、夫が頭がわるくそして夫の親戚が皆頭がヨワイからだと話していた。彼女は彼女の父親や親戚について「私は普通の頭しかないが、私の実家や親戚のものは皆大学に行っているし、夫の実家や親戚の人達とはその点でちがっているんです。私の父親は商人だったが非常に知的で感受性が高く民主的で洗練されていました」と説明し、そして夫について「私の父に比較すると、夫は頭もヨワイ、経済力もないし……」と話していた。事実夫の話によれば、彼女は結婚以来、夫の実家を訪問したこともなければ手紙さえ出したことがない。」

この症例は、家族問題（ここでは子供の情緒障害）が、夫の志向家族を投射対象とすることによって合理化されていることを示すものであるが、この種の病理的統合家族においては、夫もしくは妻が、彼等の義理の両親に対して否定的な感情をむけ、実の両親に対しては肯定的な感情をむける傾向が強い。また、彼等の両親は、息子あるいは娘の配偶者からはっきり批判されると、非常に防衛的になり、そしてその防衛は、ときには、息子あるいは娘の配偶者の両親を攻撃するというかたちで波及することがあった。

なお、分析の対象となった如何なる家族においても、夫婦が実の両親に否定的な感情をむけ、義理の両親に肯定的な感情をむけるというのが如き特徴はみられなかった。

この様な配偶者の両親を対象とする投射形態は、主として夫婦の態度や言語を通じて発見されたが、ある家族においては、それが子供の行動や態度においても発見することが出来た。

「5.8才の子供は集団生活が出来ない、独占欲が強い勝気で困るなどの主訴で相談室にきたが、その子は両親の実家をめぐる葛藤感情を反映していた。子供は母親側に立ち父方祖父母を批判した。子供は「お父ちゃんところのお爺ちゃんは、お母ちゃんの悪口を云うから悪いんだ…お母ちゃんところのお爺ちゃんはお母ちゃんにはやさしいから好きだ…」と述べていた。しかし子供は母親からしかられて、父親から何かしてもらおうと思う時は母方の祖父を批判し、父方の祖父をほめていた。」

この様に、夫婦の志向家族に対する態度や感情は、子供にまで波及あるいは反映しているが、この種のケースにおいて興味ある特徴は、夫婦が配偶者の両親を、あるいは、配偶者の志向家族を投射対象として選択していることに気づいていない点である。

なお、この種の家族のなかには、治療がすすむにつれて、夫婦が投射対象を、配偶者の両親から配偶者そのものに変化させる家族がある。

「46才の主婦は長男（18才）が東大を受験して合格したにも拘らず大学に行かずに自分の部屋に閉じこもったきりで、家族の者さえ彼の部屋に入ることを許してくれないと訴えてきた。

4回目の治療面接から夫が末子であまやかされて育てられたせいか頼りがいがないという陳述にはじまり、夫の両親に対して否定的な感情をむけはじめた。たとえば彼女は「夫の両親は夫を養子に出したんだからたといえ養子先の方で経済的に困ろうと、私達には責任はない……」という冷たい態度をとっていたと述べ、また「あまりの冷めたい態度のため人間性を疑うことさえあった…」と述べ夫の両親を批判していた。また夫は妻が独り子でわがままに育てられたために世間を知らないと不平をもらし、妻の父親が他の女性に子供をうませたこともあって妻の父親を批判していた。

8回目の治療面接の頃から、夫の志向家族に関する陳述はなくなり、長男の自閉的傾向の責任は誰にあるかが話題にあがった。妻はその原因を彼女自身に求めるよりも、夫の優柔不断な性格と、問題に直接にとりくんでいくことの出来ない逃避的性格に求めた。事実この様な傾向は家族訪問による参与観察においてもあらわれていた。たとえば問題の息子が襖を破ったり、お茶わんを投げつけて割ったり、大声で怒鳴ったりするときは、夫は用事を思い出した様に外出し、妻に対しては「この様な状態になったのは君の育て方に責任があるんだから、君がどうにか解決しなさい…君がいやがっている息子を受験校にさえいれなかったらそういうことにはならなかったのだから…」と云うばかりで、彼自らは息子と話すことを出来るだけしていた。それに対して妻は「息子は父親が頼りないから自分はこんなおかしい人間になってしまった…」と云っていたと夫に対して反抗していた。この様に夫婦共に息子の問題の原因が自分自身にあるのではなく、彼等の配偶者にあることを強調していた。」



### 3. 競合的援助関係としての拡大家族関係

日本においても、核家族化の傾向が強くなり、そしてその核家族が、経済的にも社会的にも独立することを期待されているが、臨床的に問題をもつ家族においては、その夫婦双方の志向家族がしばしば経済的に自立の能力がなく、夫と妻が自己の実の両親を経済的に援助することで競いあうという特徴がみられる。

「5才児の情緒障害児と2才児の二人の子供を持つ28才の主婦は離婚を主訴に相談室を訪れたが、彼等の夫婦関係を悪化させた要因のひとつに彼等の両親に対する経済的援助のあり方があった。この要因が彼等の夫婦関係に影響を与える様になったのは、妻が独り子であり、彼女以外に両親の面倒をみる人が居ないことと、彼女の父親が停年で退職し安定した職業についていないことだった。

彼女の夫は1ヶ月60,000円程度の給料を貰っていたが、そのうち20,000円は彼の実母に送金し残りの40,000円で、7,000円のアパートを借りて、親子4人で生活していた。彼女は夫のこの様な援助の方法に対して「長男でもないのに、どうして貴男だけが親の面倒をみなければならないの…」と云って、不平をこぼしていた。しかし彼女も、夫から貰う40,000円の生活費のなかから毎月3,500円程度のお金を作り夫に内緒で彼女の両親に送金していた。

やがてその秘密の3,500円の送金が夫にばれ、夫婦喧嘩の原因になった。その時、彼女は夫に対しておたがいの両親に対する経済援助の額が不平等だからもうすこし平等にして貰いたいと、要望した。しかしそれに対して夫は「僕は君のところに養子にきたのではないのにどうして君の両親の面倒をみなくてはいけないのだ。3,500円の援助でも、むしろやめさせたいくらいだ」と云って拒絶してしまった。そこで彼女は夫に内緒で内職をして彼女の両親のための生活援助資金をかせぎはじめた。しかしその内職のために子供の養育がおろそかになり、それが契機になって内職の秘密がもれ夫婦関係はなお一層悪化する様になっていった。」

この様に、夫婦による各々の両親に対する経済的援助の競合的関係は夫婦の全体的な役割期待の構造を不安定にさせ、ひいては親子関係にまでネガティブに影響し、夫婦の離婚の動機を強化させている。

以上、われわれは、問題核家族とその志向家族との関係を分析してきたが、これまでの資料を集約すると次の

ことが結論として云い得る。問題核家族では、夫婦が相手の両親と、どの様な関係を維持すれば良いかという問題に直面しており、また核家族の境界をどのように確立するかという点で大きな問題に直面していると。結局、家族に構造的境界が存在しないことが、家族内部で生じた問題を、その志向家族にまで波及させることになり逆にまた、志向家族が核家族内部の葛藤にからみあってくる様になっている。この様な、核家族とその志向家族との病理的なからみあいの故に、問題の本質的解決が不可能になり、しかもその問題を固定的なものにさせてしまうのである。

なお、核家族の構造的境界が確立されていないことは、個人が全体としての家族を代表することを困難ならしめ、また、核家族とその志向家族との間にかわされる相互援助によって全体としての家族の統合を強化する方向に変化させるよりも、夫婦の競合的な感情や両偏的感情を強化し、ひいては、それを行動化(acting out)させてしまっている。

### 考察と臨床的示唆

これまで、われわれは10ケースの臨床的に問題をもつ核家族の拡大家族関係網を分析して、三つの病理的関係のパターンを析出した。してみれば、何故に、また、どの様な方法で、この様な関係パターンが生じてくるであろうか。そしてそれは、具体的な診断や治療にどの様な意味をもっているであろうか。前者の問題を解決するためには、制度的視点からは、核家族の孤立化論がひとつの手がかりになり、臨床的な視点からは、家族力動論がひとつの手がかりになる。

最近まで、核家族は、社会における産業化の発展にとっても夫婦の幸せにとっても、最適の家族形態として考えられてきた。しかし今日では、その核家族が非常に不安定な状況にあることが多くの研究によって指摘されている。<sup>13)</sup>山根教授は、この傾向を「家族アノミー」<sup>14)</sup>という用語で概念化しようとしている。してみれば、何故にこの「家族アノミー」が生じてくるであろうか。おそらく、それは、社会における産業の高度化に伴う核家族の親族体系からの地理的分離(geographical separation)や構造的孤立化と、それに伴う価値規範の変動とその不統合である。すなわち、核家族を最小単位とする親族体系が再構造化される過渡的過程のなかで、核家族と志向家族との関係も不安定になり、制度的には、もはや経済的援助や、情緒的援助を受けることが困難になってきたわけである。そして、価値的には、かつて親族体系を支

配していた権威主義的—温情主義的価値と、今日の平等主義的—自己責任的価値とが対立葛藤をおこし、それが、子供のパーソナリティ形成過程、夫婦の権力構造、役割構造、情緒構造、およびコミュニケーション構造を不安定にさせるのである。そしてひいては、その不安定な構造的帰結として、子供に情緒障害をひきおこし、あるいは夫婦を離婚にまで追い込んでいくのである。

してみれば、何故に、分析の対象となった問題核家族とその志向家族とのあいだに、前述の三つの異なった関係パターンがあらわれてきたのだろうか。この様な個別的な関係特徴の形成過程をあきらかにするためには、単に社会の産業化を独立変数とし家族を依存変数とする様な制度的分析モデルでは不十分である。この個別の関係特徴の形成過程をあきらかにするためには、問題核家族の構造と機能を主体的に分析できる様な家族力動モデルが必要になってくる。すなわち、家族成員のパーソナリティと、役割と、家族組織の相互依存性が分析できるモデルが必要になってくるのである<sup>15)</sup>。報告者は、あえて、このモデルを構造—機能モデルと名づけた。このモデルに立脚して、結果として現われてきた個々の三つの関係パターンの形成過程を分析してみたい。まず、葛藤強化的拡大家族関係の場合であるが、理論的に考えられることは、家族組織を維持しあるいは、それを発展させるための夫としての、もしくは妻としての役割同一化 (role identification) が、志向家族から期待される幅のせまい伸縮性に乏しい役割期待によって阻害されると考えられる。すなわち、志向家族から核家族に期待される役割が、選択を許す程の幅のあるものでないために、夫婦は共に、パーソナリティの次元で、病理的とも思はれる程の抑圧機制をはたらかせ、それによって志向家族との関係においては—時的に役割期待の補正性を維持出来るようになっている。しかし、核家族内部における夫婦関係においては、その夫婦関係を統制する価値規範の内面化の程度が弱く、抑圧の機制が失敗に終り、夫婦が顕在的に葛藤を強化していくことが考えられる。

してみれば、何故に、特に夫婦関係を規制する価値規範の内面化の程度が、家族の他の下位体系を規制する価値規範や家族の外的関係を規制する価値規範などの内面化の程度に比較して、弱くなっているであろうか。その原因としては、夫婦の権力構造のあり方に対する満足度やその他のいろいろの要因が、かかわり合っているであろうが、より本質的要因として考えられるものは、夫婦が結婚までにすでに内面化している価値や生活スタイル (life style) が異質であることと、夫婦が、夫ある

いは妻として相互に期待される役割に同一化できないことである。

第二の葛藤投射的拡大家族関係のパターンが、どの様にして形成されるかについては、理論的に次の様なことが考えられる。問題核家族の妻は、彼女の志向家族と生殖家族とを比較し、後者に関して劣等感を経験する。すなわち、この種の妻は、結婚以前においては、社会的にも経済的にも成功している父親との同一化を通じて、彼女自身の自己愛を充足させるが、父親と比較して見劣りのする夫、たとえば彼女の父親よりも学歴のひくい夫と結婚するときは、結婚当初はともかくとして、はじめての子供を出産する頃には、かつて父親との関係において充足されていた自己愛が夫との関係において継続的に充足されないために、極度の欲求不満に陥ってしまう。そして、その欲求不満は、子供を情緒障害にしまったことに対する隣人や地域社会からの批判も手伝って、彼女のパーソナリティそのものを不安定にさせていく。そしてその不安定になった彼女のパーソナリティは、家族の目標やその相対的重要性の序列性に関して、すでに存在していた夫との意見の不一致が相乗的に影響し、その不安定度を増大化させていくのである。そこで妻は、彼女自身の不安定が子供に悪影響を与えていることを覚悟せず、子供と連合関係をつくり、夫を心理的に孤立化させることに成功するのである。そこで、夫は家族における孤立化状態から生じた孤独感と妻に対する未解決の感情を解決するために、彼の両親との結合関係を深め、ひいてはその両親を背景にして、妻と彼女の両親を直接的に非難する様になるのである。しかし、妻との関係においては、結婚生活という共通の生活経験を通じて、多少は共通の価値規範を内面化しており、したがって、夫婦間の未解決の感情は主として彼女の両親に投射されてしまうのである。なお、妻も、夫と同じ機制の下に、夫というよりも夫の両親を投射の対象に選択するものとして考えられる。

最後に、競合的援助関係としての拡大家族関係のパターンであるが、その主たる要因は、志向家族が経済的援助や情緒的援助を必要としていることと、問題核家族の夫婦間で、いまだに共通の目標が確立されていないことがあげられる。しかし、それにもまして重要なことはこれらの二つの要因が相乗的に作用して、志向家族への役割退行 (role regression) が強化されることである。すなわち、この役割退行によって夫と妻は配偶者の立場にたって思考したり、感じたりすることが困難になってくるのである。しかし、この役割退行は、夫婦間で充足



出来ない感情を代替的に充足させる機能を果しているものとして考えられる。したがって、この様な論考をすすめると、夫婦が競い合って各々の志向家族を援助しようとする生活態度は、彼等の欲求充足のための基盤を安定させ、それによって自己の安定をはかっていこうとする前意識的あるいは無意識的意図によるものとして理論的に考えられる。

以上、われわれは、問題核家族とその志向家族とのあいだの三つの関係パターンについて若干の考察を加えてきたが、その関係パターンは、臨床的にどんな意味をもっているのでしょうか、第1に云えることは、臨床家の関心をクライアントとしての個人や核家族から大家族関係へ移行し、それがクライアントや問題核家族の機能(functioning)と、どの様にかかわり合っているかを調べ、そして必要に応じてその関係を治療的介入計画のなかに導入することである。その様な治療方式の妥当性や信頼性に関しては、間接的にはあるが、ブロディ<sup>16)</sup>(Brodey)やマーティン(Martin, P. A.)の云うステレオスコピック治療方式による実証的成果が参考になるであろう。

本研究においては、親族の治療過程への導入方法は、主として家庭訪問による問題核家族の夫婦の志向家族の両親との治療的面接と観察であったが、志向家族の両親と問題核家族の夫もしくは妻とのあいだに、意見の相違がみられるときは、安定度と洞察能力がより高く評価されるメンバーに相談室に入室することを依頼し、治療計画に間接的に参加させることが好ましい様である。

第2に、この研究結果は、核家族の機能的自律性<sup>17)</sup>を強調しているが、もし、この研究結果が示唆する様に、核家族がその志向家族や親族に対して経済的にも、情緒的にも依存しないことが望ましいのであれば、臨床機関や福祉機関は、かつて大家族関係を通じて充足されていた問題核家族のニードを何らかの方法で充足させる様な、あるいは修正させる様な機能を果さねばならないだろう。臨床機関や福祉機関が、この様な視角を明確にもたない限り、核家族の孤立化に伴って生起してくるいろいろの問題に対処しきれなくなるであろう。

## 要 約

本研究は、最近の家族診断や家族治療における分析枠組の限界性を指摘しながら、問題核家族の大家族関係の特質を明確にし、その治療的意義に言及することであった。分析の対象となった問題核家族の標本の大きさは10ケースで、平均機能得点3.5点(平均最大機能得点は

7点)以下の家族であった。分析の結果、次の三つの関係パターンがあきらかになった。第1は、問題核家族の夫婦間の葛藤を強化する大家族関係であり、第2は、問題核家族の夫婦がその配偶者の志向家族の両親を投射の対象とする、葛藤投射的大家族関係であり、そして第3は、問題核家族の夫もしくは妻が、自己の志向家族の両親に対して経済的援助を競い合う、競合的援助関係としての大家族関係である。

以上の三つの関係パターンは、問題核家族の病理的側面であり、したがって、問題核家族の臨床的分析枠組は、これまでの核家族中心の分析枠組を拡大化して、大家族関係がより積極的に組み入れられたものでなければならない。実践的な立場から、臨床機関や福祉機関に要求されることは、親族体系を通じて充足させていた問題核家族の心理社会的ニードを、親族に代って解決できる様な制度的機能を創造することである。

## 註

- 1) Nathan W. Ackerman, *Psychodynamics of the Family*, Basic Books, New York 1958; John P. Spiegel and Norman W. Bell, *The Family of the Psychiatric Patient*, *Amer. Handbook of Psychiatry*, ed. Silvano Arieti, Basic Books, New York, 1959
- 2) Norman W. Bell, Trieschman, Albert and Ezra F. Vogel, *A Sociocultural Analysis of The Resistances of Working-Class Fathers Treated in a Child Psychiatric Clinic*, *Amer. J. Ortho.* 31, 388—405, 1961
- 3) ここで云う大家族関係は三世代が同居する集団としての大家族内部の関係を意味しているのではなく、リットワーク(Eugene Litwak)の云う異居近親関係(modified extended family)を意味している。Eugene Litwak, *Technological Innovation and Ideal Forms of Family structure in an Industrial Democratic society*, *The 9th International Seminar on Family Research*, Tokyo, Japan, 1965;
- 4) Hope J. Leichter, *Boundaries of The Family as an Empirical and Theoretical Unit*, *Exploring the Base for Family Therapy*, ed. Nathan W. Ackerman and others, New York, Family Service Assoc. of America, 1961.
- 5) 臨床場における個人の心理治療を中心にした拡大



家族関係の機能的な意味はすでにフロイドの「エディプス・コンプレックス」の「転位」の概念に内包されている。しかしその時の拡大家族関係の機能的意味というのは、個人に象徴的に内面化された次元のものであり、現実生活次元のものではない。したがって、フロイドにおいては、現実具体的に人間が存在していなくとも、たとえば祖父や祖母がすでに死亡していても彼等がその個人にとって重要で introject されているのであれば、それは個人の行動理解において考慮されねばならないものとして考えられているのである。しかし本論は、この様な個人の象徴的な空想次元の拡大家族関係をとり扱うのではなく、現実の核家族と親族集団の病理的関係をより体系的に理解しようとしている。本論の報告者による family psychiatrist の批判は、彼等が現実の核家族と親族集団の reciprocal な関係を第二次的にしか彼等の分析枠組において考慮していないということにある。

- 6) T. Parsons, *The Family: Socialization and Interaction Process*, The Free Press, Glencoe, Illinois, pp. 39-41
- 7) L. L. Geismar and Beverly Ayres. A. Method for Evaluating the Social Functioning of Families Under Treatment, *Social Work*, 4. No. 1. 102-108 ; L. L. Geismar and Beverly Ayres, *Measuring Family Functioning; A Manual on a Method for Evaluating the Social Functioning of Disorganized Families*, St. Paul, Minn., Family Centered Project, 1960
- 8) N. W. Bell は病理的な拡大家族関係について、次の4つの知見を発見している。それは (1) Extended Families as Countervailing Forces, (2) Extended Families as Stimulators of Conflicts, (3) Extended Families as Screens for The Projection of Conflicts, (4) Extended Families as Competing Objects of Support and Indulgence である。しかし Bell は何故にその様な関係があらわれてきたかについては、まったく考察していない N. W. Bell, *Extended Family Relations of Disturbed and Well Families*, *The Psychosocial Interior of The Family*, ed. Gerald Handel, Aldine

Publishing Company, Chicago, pp. 189-203. 1967. なお Kalman 等はこのような主体的な境界維持のできない拡大家族関係を The Merged Family Network と呼んでいる。Kalman Flomenhaft and David M. Kaplan, *Clinical Significance of Current Kinsip Relationships*, *Social Work*, 13., No. 1. pp. 73-75 1968.

- 9) Nathan W. Ackermen, op. cit., pp. 83-84. ; Erik H. Erikson, *Identity and The Life Cycle*, *Psychological Issues*, ed. George S. Klein, International University Press, New York, pp. 19-26, 1959.
- 10) Norman W. Bell, op. cit.
- 11) Lyman C. Wynne, Irving M. Ryckoff, Juliana Day, and Stanley I. Hirsch, *Pseudo-Mutuality in The Family Relations of Schizophrenics*, *Psychiatry*. p. 21. 1958
- 12) Cf. Norman W. Bell, op. cit.
- 13) 阪井敏郎, 「愛とその実現を防げる 疎外的性格」『社会福祉評論』33. 34 合併号大阪女子大学・社会福祉研究会発行 p. 24 昭和43年
- 14) 山根常男, 野々山久也「日本における核家族の孤立化と親族組織」『社会学評論』69巻 73-75頁
- 15) 本村汎「家族診断論」『社会福祉論集』12. 13 合併号大阪市立大学社会福祉学研究会発行 p. 15-31 を参照のこと
- 16) Brodey W. M. and Hayden. M., *Intrateam Reactions: Their Relation to the Conflicts of the Family in Treatment*, *Amer. J. Orthopsych.* 27, pp. 349-355, 1957
- 17) Alwin W. Gouldner, *Reciprocity and Autonomy in Functional Theory*, *Symposium on Sociological Theory*, pp. 242-261, 1958. 核家族を最小単位とする親族体系は、核家族の機能的自律性によって、緊張と摩擦を生むが、その緊張と摩擦は親族体系の崩壊につながるものではなく、むしろ親族体系がより適合的な構造に発展していくための原動力として考えられる。すなわち核家族の機能的自律性は、親族体系がより適合的に再構造化していくための原動力として考えられるのである。

### Summary

This paper attempted to clarify the pathological features of the extended family relations of the problem nuclear family and to suggest their diagnostic and therapeutic implications. The sample for analysis was selected from the client population with whom the author was working as a social worker from April in 1963 to April in 1966 both at the child guidance clinic of the Department of the Science of Living of Osaka City University and the civil service agency of Amagasaki city in Hyogo prefecture. The sample size was 10 cases of the problem nuclear family.

The results derived from the analysis indicated that the extended family relations of the problem nuclear family could be divided into three different types of features as far as the sample is concerned. They were 1) extended family relations as increasing the marital conflict of the problem nuclear family, 2) extended family relations as a channel for projecting the marital conflict and 3) extended family relations as countervailing the economic help to the parents of the spouses.

Such results suggested that the clinicians such as social worker and counselor should give more attention to the features of the extended family relations when they work with husband and wife of the problem nuclear family.